

所属	看護学研究科 看護学専攻 分野	修士課程	修了年度	2019 年度
氏名	高見沢 愛弓	指導教員 (主査)	林 慶子 教授 (堤 千鶴子教授)	

論文題目	卒後 2 年を経過した看護師の患者安全のための看護実践自己評価と教育方法との関連
------	--

本文概要	
<p>【目的】 本研究では、卒後 2 年目看護師が患者安全に留意した看護を実践するための効果的な教育方法について明らかにすることを目的とする。</p> <p>【方法】 2019 年 5 月～同年 10 月までの 6 ヶ月間を調査期間とし、無記名自記式質問紙調査による量的関係探索研究を行った。研究対象は、関東 1 都 6 県の 200 床以上の一般病院（329 病院）に勤務し卒後 1 年目から継続教育を受けた卒後 3 年目看護師とした。除外基準は、卒後 1 年目で現在の部署に就職した後、配置換えを経験していること、助産師、准看護師に該当することとした。調査項目は、①基本属性、②教育体制、③インシデント経験後の振り返り、④『患者安全のための看護実践自己評価尺度～病棟看護師用～』（以下、尺度と略す）の 40 項目とし、①～③の関連を統計解析ソフト（IBM SPSS Statistics24）を用いて分析した。</p> <p>【結果】 調査用紙配布数は 1,014 部で、回収数 268 部（有効回答数 264 部、有効回答率 26.0%）だった。尺度 40 項目（5 件法）の総合計点は、平均 152.3 点±22.0 点（最低 40 点～最高 200 点）であり、日々の看護業務の中で「不明なことがあれば手順書で確認している」に当てはまると回答した看護師ほど、尺度 40 項目全てにおいて高い得点を得ていた（$p < 0.05$）。また、卒後 2 年目の時に、ハイリスク薬剤の研修で準備から投与までの一連の流れについて演習を受けた看護師ほど、尺度 40 項目のうち 10 項目において平均得点が統計的に有意に高かった（$p < 0.05$）。また、医療安全研修で学んだことをよく伝達している看護師ほど、尺度 40 項目のうち 10 項目で高い得点を得ていた。さらに、研修受講後に配布された資料を活用していると答えた看護師ほど尺度 40 項目のうち 14 項目で統計的に有意に高い得点を得ていた。次に、卒後 2 年目のときに自身の看護技術到達度をよく把握していたと答えた看護師ほど尺度 40 項目全てで高い得点を得ていた。インシデント経験後、「手順書を活用した振り返り」、「資料を活用した振り返り」、「管理者・先輩看護師との振り返り」をしているほど尺度 40 項目の得点が高かった。</p> <p>【考察】 卒後 2 年目看護師が、日々の看護業務の中で患者安全に留意した看護実践をするための効果的な教育方法は、「患者安全を守りながら看護実践するための教育」「卒後 1 年目から 2 年目にかけての自身の看護技術到達度評価」「インシデントの経験とその振り返り」の 3 点であった。特に「患者安全を守りながら看護実践するための教育」として、卒後 2 年目の時に手順書での振り返りを行っている看護師ほど尺度との相関を認めた。このことから、手順書での確認が、患者安全に留意した看護実践をする上で重要であると示唆を得た。卒後 2 年目看護師に、不明なことがあれば手順書で確認することを意識させるために、研修で得た知識や技術を伝達させて、配布資料や手順書を見直し理解を深めることは、患者安全の看護実践をするための効果的な教育方法と考える。さらに、卒後 2 年目看護師が、インシデントを経験した時に、手順書や資料の活用、管理者・先輩看護師と振り返ることも、患者安全に留意した看護を実践する上で重要であると考える。</p> <p>【キーワード】 卒後 2 年を経過した看護師、患者安全、看護実践自己評価、教育方法</p>	